



News Letter

Vol. 25

ひょうご被害者支援センターシンポジウム

「命の大切さを学ぶ授業」のパネリストとして

神戸市立多聞東中学校 校長 好本 行秀



本校は2014年1月、2014年7月、そして2015年6月と犯罪被害者ご遺族の市原千代子さんによる1年生を対象にした『命の大切さを学ぶ授業』を行っており、その成果をぜひ報告してほしいという依頼を受けて、パネリストとして参加しました。

私は6年前に本校に着任しましたが、常々教職員に「教師は生徒に勉強を教えて学力をつけるだけでなく、将来、大人になった時、自分の幸せを掴む、あるいは友達、仲間の幸せを創りあげていく生徒を育てることが中学教育の大きな目標と考えている。」と言ってきました。

また、生徒たちには『目指す生徒像』として次の4点を掲げました。

1. 元気な挨拶ができる生徒になろう。2. 思いやりの心を持ち、素直に感謝できる生徒になろう。3. 規律を守り、規則正しい生活をする生徒になろう。4. 意欲的に学び、切磋琢磨しあえる生徒になろう。特に1と2については、生徒が人間社会の中で周りの人と協調して生きていくためにぜひ必要と考え、ことあるごとに生徒や教職員に話をしています。

しかし、残念なことに校内が荒れる中で生徒の会話の中に「死ぬ!」「殺すぞ!」という言葉が耳にすることがありました。私はこの2つの言葉に対しては「人の命を左右するような言葉を発することは絶対に許せない!」という信念を持っています。ですから、そういう言葉を発する生徒は許せないし、心の矯正が必要だと思いました。

そのような時、一年生の総務の提案で「命の大切さを学ぶ授業」を開始しました。当初は実際に被害に遭ったご遺族の生々しいお話にはずいぶん抵抗がありましたが、2014年1月29日に第一回目を開催いたしました。残念ながら私は出張で参加できなかったのですが、後で総務が本校HPに掲載した生徒の感想文には「集団で殴ったり蹴ったりしている場面を聞いている時、心が苦しくなりました。今、部活でも学校生活でもいろんな人間関係があり、目の前でいやがらせをする人や陰口を言っている人に疲れます。でも私にはすごくやさしい友達がいるし、部活動で一緒に頑張る友達があります。なによりも家に帰ってから忙しくても「今日何あったん?」と聞いてくれるお母さんがいます。私は楽しかったこともイライラしたことも、悲しかったことも全部お母さんに言えます。こんなお母さんがいてくれて本当に幸せだなあと思います。～中略～ 私の手を犯罪で染めず、人の命を助ける手にできるようにしたいです」と、抜粋が載せてありました。これを読んだ時にやってよかったと素直に思いました。

2回目は2014年7月9日、今年は2015年6月10日に開催しました。今年はナーバスな生徒がいるので気になりましたが、感想文では、「学校生活を送る中で被害者にも加害者にもならないようにしたい。」「この手は人のことを傷つけない手にしようと思います。」「自分の命は自分で大切にしていこうと思います。」「被害者になるのは避けられないけれど、加害者になるのは自分の判断次第だということが一番心に残った。」「この授業で命の大切さとか、いじめや犯罪を絶対にしないようにしようと思いました。」「(犯罪者は)自分がしてしまったという思いを一生抱え、後悔しながら生きて行かなければならないと思いました。」等いろいろな感想が出てきたのに驚きました。決して紋切型の感想ではなく、生徒一人一人の心に響いた、あるいは想い描いた言葉でそれぞれ違うものでした。

また、これらを「学年便り」にフィードバックすることによって、「あっ!こんな想いがあるんだ」と、感じ方の違いを生徒が互いに知り、認め合う良い機会になりました。本校では、命の大切さを伝える授業として、性教育での命の誕生などや道徳教育も実践していますが、これとは違うご遺族の「被害者にも加害者にもならない!」といったリアルなお話は臨場感や迫力が全く違うものです。それだけに生徒の心に響く力も大きいと考えています。

本校は3年連続で「命の大切さを学ぶ授業」を行いました。その成果として現在、学校は5年前の荒れた時期に比べ落ち着いた状況を取り戻し、暴力に訴えるような生徒はほとんどいません。一方、「いじめ」に対する取り組みでは、昨年小学校と連携し児童・生徒たちが「いじめ撲滅のスローガン」、『いじめをするな!させるな!見逃すな!』を創り、決定、地域ぐるみでいじめ撲滅に向けての取り組みを行っています。その根底には「命の大切さを学ぶ授業」があるように感じます。そしてこの活動が今後、他の多くの学校にも広がって欲しいと思っていますし、本校も継続してぜひ『命を大切に授業』を行い、生徒や教師の心の醸成を促し、また、保護者の皆様にも聴いていただきたいと思っています。

●「命の大切さを学ぶ授業」を始めた経緯について(要旨)

兵庫県警察本部 被害者支援室 室長 増田 悦子

犯罪や交通事故は突然、何の前触れもなく発生し、国民の犯罪被害者等に対する理解というのは非常に不十分で、なかなか理解が得られない、その為に国は被害者の置かれた現状を理解していただくための施策を実施してきた。

その中で警察では関係機関、団体と連携して犯罪被害者ご本人や家族の方による講演会を開催し、犯罪被害者等がおかれた過酷な境遇や、命の大切さ等について理解を深めていただく活動を進めた。

犯罪被害者等が受けた被害や、命の大切さ、被害者支援の必要性について理解が深まれば、社会全体で被害者を支え「被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた気運が醸成され、ひいては安心して安全に暮らせる地域社会が実現されると考えた。

平成21年度に国のモデル事業として、中高生を対象とした「命の大切さを学ぶ授業」を開催したところ、遺族の言葉の重みに触れた生徒が、「事件や事故に遭って亡くなってしまった被害者の家族がどれだけ悲しみ、大変な思いをしているかがよくわかり手助けをしたいと思った」などの感想が寄せられるなど、子供たちの心に確実に伝わっていくことが分かった。

兵庫県警では、平成22年の1月からひょうご被害者支援センターと連携し、犯罪被害者ご遺族の協力を得て「命の大切さを学ぶ授業」を始めた。

ご遺族の講演や犯罪被害者手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた痛み、子供を亡くした親や兄弟の思い、命の大切さ等を理解させ「犯罪を起こしてはならない」という規範意識の醸成、自分や他人の命を大切にすること、いじめや暴力をなくすことなど子供たちの心に響く授業を開催している。

授業を受講した中学生等からは「命について真剣に考えられた」「自分の命だけでなく他人の命も大切にしよう」「いじめは絶対にしてはいけない」という感想が寄せられるなど、被害者の思いがしっかり伝わっている。

今後は生徒と保護者の方が一緒に聴いていただけるような命の授業にして行きたい。

●「終着駅のないレールを走り…」<基調講演要旨>

ひょうご被害者支援センター 理事 高松 由美子

最後の写真



生命のメッセージ展



私たちに終着駅はありません。一生遺族だと思っています。高校1年の生徒手帳の写真。「まさか遺影になるなんて」生命のメッセージ展。亡くなった当時180cm、85kg、その等身大のパネルと最後の靴。新たな声が聞こえるとしてアートと一緒に…。



住吉神社。息子が一番好きな場所。兄弟仲良く遊んでいた神社が事件現場になった。とても辛くて10年以上行けなくて神社の見える家の窓も開けられなかった。でも思えば聡至の一番好きなところ。

そう思い写真をみんなに見てもらいたい。



犯罪被害者自助グループ「六甲友の会」の風景。こういう畳の部屋で私たちは車座になり自由に気持ちを本当にゆったりと話している。いろんな人が、様々な気持ちでほっとする場を作っています。

六甲友の会は、センターの理事でもある臨床心理の先生にコーディネーターをしていただいている。そしてマスコミとの勉強会をしている。事件があるとすぐにマスメディ

ア。それを解消するため私たちのグループで勉強してもらおう。

このセンターが立ち上がってから開催してきた会合は100回以上になった。



命の授業の風景。生徒たちが被害者にも加害者にもならないように。生徒達は「命の大切さ」を聞き、それによって今まで言えなかったこと、自分の心に残ったことを親や友達と話したりしている。

私の場合は少年事件だった。

手足が凶器になる!

この手足は必要で人を助けますが命を奪うのです!

これが一番伝えたいこと。



手集「おもかげ」の中に一番皆さんに知ってもらいたいのはコップ。社会がコップに。学校の生徒たちがみんなコップになって、いじめや悲しいことがあっても受け止めてあげる学校になってほしいとの想い。

これが「おもかげ」の一番遺族にとって伝えたいこと。



「デジタル紙芝居」を披露するひょうご被害者支援センター相談員



「命の大切さを学ぶ授業」を受けた生徒の感想文を朗読する
ひょうご被害者支援センター相談員

● 坂口 真弓 (全国犯罪被害者の会「あすの会」会員) 基調講演抜粋



皆さんにとって「大切と思える人」は誰ですか?この人はいつも自分の味方をしてくれると思える人はだれですか?私にとって、坂口悟がそう思える大きな存在の一人でした。

弟坂口悟は27歳になっても人懐っこくて、いたずら好きで、照れ屋で口が悪くて偉そうで、それでも優しく、泣き虫で自分の娘に甘くて周りの人に「俺自分の家族がすごく好きやねん」といえる男。

2000年2月、車の通行をめぐるトラブルで当時18歳の少年に弟は殺害されてしまいその幸せは一瞬に奪われてしまった。大切な人を失って、いまでも家族が殺される悪夢やフラッシュバック。精神安定剤を大量に飲んで自傷行為をした。言葉には敏感になり、「お前死ね」「お前殺すぞ」「お前消えろ」と言う言葉はたとえ自分に言われた言葉でなくても道を歩いている時に冗談で話している言葉が聞こえてきただけでも動悸がする。

一昨年PTSDの治療は終えたが医師からトラウマは一生残ると言われた。被害者になるというのはそういうことだと。

どんなに治療してもらってもどんなに支援してもらっても悟が生き返ってこない限り事件の前には戻れない。

「被害者への偏見」「間違った報道」による心無い批判、中傷されている被害者の方は少なくない。「被害者の偏見をなくすこと」それはその人の命、生きてきたことを、生きてきたことの尊厳を守るのだと思う。

毎日の暮らしを、まず大切にすることが、自分の命を大切に生きること。弟の事件のことで自分の体験したことを伝えるのは、これが、弟、悟の命を無駄にしたくない!という気持ちから。

「願い」という歌詞の中に「笑顔で暮らすことの意味、笑顔を奪い去ることの罪」というのがあり、それを初めて聴いたとき、私の心にすごく響いてきた。

私は事件の被害者遺族になって、笑顔になれるということはとても尊くて、幸せなことだと気づきました。どうか皆さんは、大切な人との笑顔の時間を大切にしてほしい。皆さんが人から笑顔を奪う人ではなく、だれかの笑顔のもと、笑顔の支え、笑顔を守れる人になって、自分の命を精一杯輝かせ、笑顔いっぱいの人生を送ってくださることを願っています。

● パネルディスカッション

「命の大切さを学ぶ授業」の重要性を問う

コーディネーターとして羽下大信氏(臨床心理士)、パネリストとして増田悦子氏(兵庫県警被害者支援室長)、基調講演者の高松由美子氏(当センター理事)と坂口真弓氏(全国犯罪被害者の会「あすの会」会員)、好本行秀氏(神戸市多聞東中学校長)、三木広美氏(当センター犯罪被害相談員)らが、それぞれの立場から「命の大切さを学ぶ授業」の重要性や方向性についての発表と意見交換を行った。(発言要旨)



増田氏: 将来の社会を担う子どもたちが「被害者にも加害者にもならない、もし近くに被害者がいたら自分たちが支えてあげよう」と思ってくれたらと思います。ご遺族の方には本当にご苦勞をおかけしますが、一緒にこの授業を開催していきたいと思ひます。

坂口氏: 活動の原点は、「弟の命を無駄にしたくない」という気持ちから。被害者遺族が自分の経験の話をするのは本当にパワーがいる。伝えたい!という気持ちは、「誰かの何かの役に立てれば…」 「一人でも加害者が減れば…」 という思い。私たちの体験談を聞いてもらえる機会をたくさん作ってもらえればうれしい。

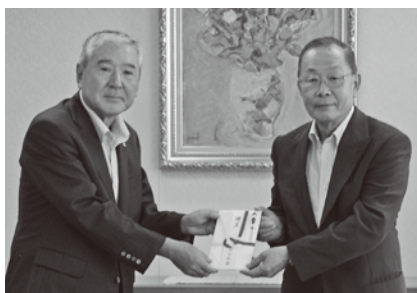
高松氏: 生徒達は私たちの話をしっかり聴いて受け止めている。同授業を行うことに、生徒らにはなんの問題ない。子供達から心に響く手紙や感想文を頂き、「命の大切さを学ぶ授業」を続けようと思ひがけられている。

好本氏: 巻頭言として掲載

三木氏: 寄せられた「命の授業」のアンケート、感想文、すべてから感じることは授業を聴いた子供たちがそれぞれの環境で今の自分と向き合っ、命について真剣に考え、向き合う時間をしっかりと持っている。この「命の授業」の意義深さ、大きさというのは子供たちにとってこれから生きていくうえで本当に計り知れない意味を持っている。一人でも多くの子供たちに受けてほしいと思ひます。

羽下氏: 子供たちの反応は、こういうリアルな話には絶対、正対してくる。まともに向かってくる。学校自体も子供自身の苦しいところをクリアするヒントをもらっている。

感謝～多額のご寄付をいただきました～



尼信かなめ会 会長 大島 三十二 様
(写真左)

尼信かなめ会様は尼崎信用金庫のお取引先を中心とした組織で、会員相互の親睦と事業の発展及び地域社会への貢献に寄与することを目的としておられます。



株式会社 大栄 代表取締役 生島 健緒 様
(写真右)

株式会社大栄様は兵庫県を中心として不動産賃貸業、中古住宅のリノベーション事業を営み、地域社会の奉仕活動に積極的に取り組んでおられます。

Topics



1 第64回“社会を明るくする運動”

高松由美子さん(被害者ご遺族、当センター理事)が法務大臣より感謝状を授与

“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。高松さんは永年に亘り全国規模で“社会を明るくする運動”に惜みない協力を続け、今般、法務大臣より感謝状を授与されました。

2 募金箱の設置ありがとうございます

兵庫県警察本部被害者支援室のサポートを得て警察署や警察本部関係部署に当センターの募金箱104個を設置いただきました。新たなる収入の基盤になり、また、広報への効果も期待されます。募金箱設置にご協力いただける場合は、ひょうご被害者支援センターまで連絡をお願いいたします。



被害者支援自動販売機設置にご協力ありがとうございます

皆様の温かい応援をいただきまして、41台(27年11月現在)の被害者支援自動販売機が設置されました。

●ご協力先様●

アサヒ飲料株式会社
尼崎信用金庫職員生活協同組合
株式会社伊藤園
金井自動販売株式会社
株式会社カネカ
株式会社加美乃素本舗
株式会社柄谷工務店
関西キリンビバレッジサービス株式会社
関西建設工業株式会社
国津商事株式会社
KENSOWAKAコーポレーション

神戸スタンダード石油株式会社
神戸星城高等学校
コカ・コーラウエスト株式会社
コベルコ教習所株式会社
サントリービバレッジサービス株式会社
株式会社ジャパンビバレッジウエスト
株式会社タイガー
ダイドービバレッジサービス株式会社
多木化学株式会社
日笠工業株式会社
パレス神戸

兵庫県警察本部
学校法人兵庫県自動車学校 西宮校
学校法人兵庫県自動車学校 明石校
学校法人兵庫県自動車学校 姫路校
兵庫ヤクルト販売株式会社
株式会社北海
マイスター工房八千代
武庫川女子大学
株式会社宗像建設
ヤスダ産業株式会社

(敬称略)

私たちの活動は、会費や寄付等で支えられています。支援はすべて無料で行いますが、支援員の養成・研修・広報啓発活動・事務局の運営などに経費を必要とします。被害者の方が安心して相談できるための活動を理解し、ご支援・ご協力をお願いいたします。

会員募集

ひょうご被害者支援センターの活動を支える仲間を募集しています。ご協力をお願いいたします。

| | | | | |
|-----|------|----|-------------------|----------------------------------------------------------|
| 年会費 | 正会員 | 個人 | 5,000円 | 郵便振替 口座番号：00940-7-305791 口座名義：公益社団法人 ひょうご被害者支援センター |
| | 賛助会員 | 個人 | 一口 1,000円(何口でも可) | |
| | | 団体 | 一口 10,000円(何口でも可) | |



発行日：2016年1月
発行者：公益社団法人
ひょうご被害者支援センター
事務局：TEL 078-362-7512
URL：http://supporthyogo.org

編集後記

ひょうご被害者支援センター主催シンポジウム(平成27年11月3日、於：兵庫県民会館)
「命の大切さを学ぶ授業～子ども達を被害者にも加害者にもさせないために～」
「命の大切さを子どもたちにどう伝えるか」をテーマに開催されました。
「命の大切さを学ぶ授業」が県内で広がっていくことを願っています。
開催をご希望の方は左記センターまでご連絡ください。